

オコト 交配

# こがね (黄肉種)



耐病性黄肉大果の豊産種

＜特性＞ 草勢がとくに旺盛で、ツルが太く葉も大型である。開花や着果が特に早く、低温着果性の良い中早生の豊産種である。

果実は、8～10kgの高球型大果で変型果や・空洞が無い。果皮は薄いが堅く、割れにくいので輸送に耐える。果肉は見事な濃黄色で黄肉種で、は極めて甘味がつよく、その糖度は平均12度あり、肉質柔らかく、繊維少く、クリーム独特の上品な食味を持っている。

＜適作型＞ トンネル栽培の大玉出荷に最適するが着果が良いのでハウス栽培の促成、早熟栽培にも好適する。

＜注意点＞ ツルが太く、分枝は赤肉種よりやや少なく、一株の着果数は2～3個でやや少ない。着果を増すには、初期に摘芯して子ヅルを多く出すようにすると良い。

今ノ市場で大評判の《こがね》すいかノ

栽培型	月別	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
ハウス		○	●	■						
大型トンネル			○	●	■					
トンネル				○	●	■				
マルチキャップ				○	●	■				

○ 播種 ● 育苗期 ■ 定植 ■ 収穫期





ナント交配

# こがね (黄肉種)

高収益に沸く、黄肉種！

## ★この特性をよくつかんで★

西瓜の黄肉大玉種は赤肉品種とは異なる特性を保ち特別な栽培方法を考えないと特性を発揮しがたいために、黄肉種の普及率が低いと考えられる。又黄肉種は特に太陽光線を多く必要とする。品種の特性を活かすには促成～早熟では赤肉種に比較して収穫果数の目標を低くして果重を大きくするように株間を特に広くするとよい。

こがね西瓜は最も大玉種で大玉の方が市場性が高く出荷等級で3L～4Lが好評である。果重は10～13kgの大玉を栽培すると10アール500～600果で6t以上の収穫目標とする。

《促成栽培》をするにはハウスの無加温の5～6月出荷では12月上旬に接木し10アール450～500株で1株1果収穫とする。低節位の無理な着果は変形果や小果となる。果実を肥大させるには3本整枝で18節内外の3番花に着果させるようにする。これには定植後45日目に3番花を開花させて着果時には草勢を強過ぎない程度に強くすることが大切でありツル間を広く20～23cm内外が良い。したがって定植株間を60cm～70cmにする。収穫時まで肥料切れをさせないことである。これには育苗日数も西瓜の播種後定植まで60日以上で育苗した良い苗を定植するとよい。育苗床においても鉢間を広く西瓜や台木の葉が重ならない程度に最初から株間を広くして2～3回鉢づらしを慣行し、大苗の健苗を育成することが必要である。

《早熟栽培》 促成栽培同様の育苗をするがハウス内は少し密植して10アール550～600株を定植の基準とするがこの時期に於いてもツル間は20cmとするには60cm株間で3本整枝が良いが早熟でも15～18節に着果させて草勢を強く栽培する。草勢が強い場合にツル間が狭くなったりすると光線不足で雌花の開花が遅れて着果不良や変形果になるから特に定植時の

株間には注意すると共に、草勢が弱い場合は整枝、第1回目を定植30日目頃にして、着果は定植後43～45日目に授粉をして着果させる。この授粉が早くなるような徒長する栽培管理では品質がわるくなることがあるから注意する。

《トンネル栽培》に於いても10アールの着果は70玉内外を目標とすると果実の重量目標は平均8kg以上で10アール5t～6tの収量となる。この目標で栽培するが1方向整枝では10アール350株を定植し4本整枝すると10アール1400本のツルであり、10アールの畦の長さが300mとすると株間は約80cm～90cmとなる。ツル間も20～23cm内外であり葉が重ならないから光線をよく利用して大玉の果実を収穫することができる。

以上のようにいずれの作型に於いても大果を目標とすることが市場性を高め品種の良い秀品率を高くし出荷率を高めることができる。

こがね西瓜は、葉に太陽光線を充分に取り入れていづれの時期でも同化作用を良くすることが大切である。

肥料は赤肉種に比較して10～20%増量し、最後の収穫まで肥料切れを出さないように作型によっては元肥や追肥に注意する。

特約店